



発掘 文学の宝



町では、本年度より「熊本県夢チャレンジ事業」を活用し、苓北町に残る文学の宝を発掘しています。今回は苓北町にゆかりのある文豪たちを紹介する連載企画第5回目として、前回に引き続き、苓北町富岡出身で歌人、作家の「高橋喜惣勝」の逸話についてご紹介します。

企画／ドットワークス 下川嘉奈

高橋 喜惣勝

1910年2月28日 - 1952年6月12日
熊本県天草郡富岡(現・苓北町)生まれ



富岡出来町出身

昭和19年、國枝治の名で発表した「技術史」が芥川賞候補となった地元苓北町出身の歌人、作家。病のため夭逝。

芥川賞候補作家で プロレタリア歌人

平井 建治

喜惣勝は、明治43年2月28

日、旧富岡町3299番地、父熊八郎、母ヒデの6男として生まれた。出来町の元森呉服店が屋敷跡である。高橋家は天領期より海産物・呉服を商う田畑屋という商家だった。出来町は、眼科医を初め桶屋・醤油屋・下駄屋・酒屋・薬屋・米屋などの商店街であった。客人は代官所へ出入りする天

草郡中の村人たちである。富岡町は幕末まで繁栄したが、明治6年、郡役所が本渡へ移転してから、急速に疲弊していった。喜惣勝の少年期は、漁業不漁、商売不振、炭鉱閉山と、富岡町が最も衰退した大正時代であった。富岡小学校高等科に在学中、文集「懐古」を発行し、学校で話題となった。後に、友達だった4丁目の汐崎キヌさんや1丁目の上田秀子さんが、「キソカツは文章が上手だった。頭が良かった」と、生前、筆者に話してくれた。

田畑屋は大正期に入り極貧の生活に陥り、喜惣勝は中学校進学を諦め天草を出郷する。一時、兄を頼って大阪の山下コークス会社に就職。苦学して大阪泰西学館英語科を終え、上京して法政大学専門部に入学したが、学費が続かず退学した。昭和6年、神田の中央パブテスト教会のケナード博士が指導する、文芸グループ「吾らのグラフ」に入会。これが喜惣勝の運命を変えることになる。当時、流行していた社会主義思想に触れ、文学活動に目覚めていく。本格的に

短歌に没頭して、次々と作品を発表していった。同9年、歌集「天草灘」、同10年歌集「世紀の歌」を発表。同年に「新短歌クラブ」を結成して、そのリーダーとなった。同13年、関西日報に「海の家族」、東奥日報に「神の仁義」を発表した。しかし、戦雲たなびくこの時期、プロレタリア活動に官憲の取締りが入り、同人誌の廃刊も余儀なくされた。同17年、治安維持法違反で検挙され拘留される。その後も厳しい弾圧を受けながら、同19年、「芸首都」にペンネーム国枝治で発表した短編小説「技術史」が芥川賞候補となった。後年、小説の神様と称された横光利一が、この作品を読んで「ひとつの素材として忘れることのできないものがある」と評した。戦後も創作活動を続けしたが、一人息子が進行性筋萎縮症にかかり、厳しい治療に追われる貧困暮らしであった。その生活記録「それでも親はあきらめず」は、ベストセラーとなり、全国の身体障害児を持つ親から支持された。同27年6月12日死去。享年42歳。

喜惣勝は、終生、天草への

郷愁を抱きながら、早くからクリシタンをテーマにしていた。戦後、全国的に有名な龍ヶ岳町出身の農民文学作家・島一春がいたが、その先達であった喜惣勝の偉業を、私たちは忘れてはならない。

わが故郷は 南の国よ
働いても 働いても食えぬ
漁夫のいる町

故郷の曲崎なら 砂浜に
ながながと松つづきおり
浜茄子の咲く

夜の灘を
吹きあげてくる西風が
釘の腐れおちた雨戸を叩く
海の町

海の見える墓場に来れば
父のことが胸にくる
医者にもかかれず
死んだ父のこと

故郷にもう一度
かへりたうなる この心
家はなけれど
父はなけれど